

日露戦争期の日本軍による地図作製

日清戦争期までに日本軍が作製したアジア地域の地図については、2017年に刊行した『近代日本の海外地理情報収集と初期外邦図』（大阪大学出版会）で概観し、現在はそれを基礎に日露戦争期の地図作製の検討に着手している。日露戦争は、日本が初めて体験した本格的近代戦というだけでなく、2004～5年の百周年の頃から、第一次世界大戦を先取りしたような戦争と考えられるようになってきている。旅順の包囲戦だけでなく、「会戦」といわれるような戦闘でも、強固に構築されたロシア側の陣地を相手にする攻撃には、第一次世界大戦の西部戦線における塹壕戦を思わせるようなところがあるからでもあろう。

日露戦争というと、公式戦史である『明治三十七・八年日露戦史』に多数の付図があり、それで用が済むかのように思われるかも知れないが、その編集方針では、「添付すべき地図は戦闘地域の必要なる部分のみ記載し、他は全くこれをはぶくかもしくは極めて概略にすべし。理由 戦闘経過を知るにたり且つつとめて秘密地図暴露の範囲を狭小ならしめんがためなり」（中塚明『歴史の偽造をただす』94頁）とされているし、日露戦争に従軍し、『明治三十七・八年日露戦史』を編集した瀧原三郎が「参謀本部編纂の日露戦史の附圖は戦争當時使用せし地圖とは全然別物にて、今日の讀者にして當時我軍が此様な完全なる地圖を使用せしものと思ふたらば大變の間違ひである」（偕行社記事641）と述べているとおり、軍事情報としての地図をそのまま公開することは、はじめからできなかったことをまず理解する必要がある。公式戦史の付図は、したがって戦争の現場で使われた地図というよりは、戦争の経過の説明に使う地図ということになる。そのベースマップには、戦後におこなわれた戦史用測量にもとづくことがわかるものも少なくない。

さて、日露戦争期の日本軍が戦場で使った地図という点からみると、そうしたものを対象にした研究はほとんどない。戦闘に従事した野戦指揮官は、不十分な地理情報のため、偵察により地図を作りながら直面する状況に対応する場合も多かったと考えられるが、そうした野戦用地図は日露戦争の終了とともに処分されるか、秘匿されて、そもそも閲覧しやすい状態のものがない、という状態である。現在も行われている日露戦争の野戦の研究では地図情報について触れられることもあるが、それは戦場で使われた地図そのものというより、指揮官たちの回想にあらわれる地図の評価にしたがっているのも気にかかることである。そのなかには、あきらかに指揮官たちの主観的な評価と判断されるものもあり（外邦図研究ニューズレター12: 78-79）、注意を要する。

大浜徹也・郡司厚「田村正『征露日記』の世界」（北海学園大学人文論集33）には、その原本に従軍日記の筆者が作った地図のほか、何枚もの関連地図が添付されていると解説されるが（うち一点のみ写真掲載）、これについては、筆者の田村正が騎兵隊の分隊長として偵察や地図作製を行うことが多く、しかも病気のため途中で日本に送還されたという特別の事情を考えねばならない。これらは貴重な資料なので、是非画像を公開していただきたい。この種の地図では、作製の経過や作者がわかる極めてまれな例である。

もう一つ触れておくべきは、戦場で日本軍が使用した地図のソースとして、ロシア軍が作製した地図のしめる位置が大きいという点である。日清戦争では、中国側作製の地図はほと

んど参照されないが、日露戦争では、陸戦の緒戦となった鴨緑江渡河作戦に際し戦死したロシア軍将校の持っていた地図を翻訳複製するほか、その他の機会に「鹵獲」したロシア製地図の翻訳複製によるものが少なくない。本号掲載の報告では、それから作製され地図を検討している。その原図を推定する際に、いまのところアメリカ議会図書館で撮影した同時期のロシア製図を参照しているが、まだ日本軍が参照したと特定できる例を発見していない。ともあれそうした図では、ロシア製図に表示された地名が漢字で書かれることもあるが、音訳のカタカナで表記される場合も少なくない。この地名関係の作業は通訳が担当したとされているが、一部だけでもロシア側の図と対照してみたいところである。

戦争における地図は、その不備が大きな意義を持つ場合を除き、研究者の関心を引くことはほとんどない。ただし、満洲軍総司令官であった大山巖の訓示（1904年5月）にみられる、作製に手間のかかる地図は戦場で敵に奪われることのないようにせよとの指示をみると、戦闘に勝利するための基礎的なインフラとして地図が位置づけられていたことがよくわかる。流布している戦史に書かれることはまずないとはいえ、その整備にどのような努力が行われたか、今後本格的アプローチが必要である。今日、いわゆる「インテリジェンス」の重要性が指摘されることが多いが、地図についてはまだほとんど手がつけられていないのである。将来的には、地図の整備過程も含めた戦史が準備されるべきであろう。（小林茂）